

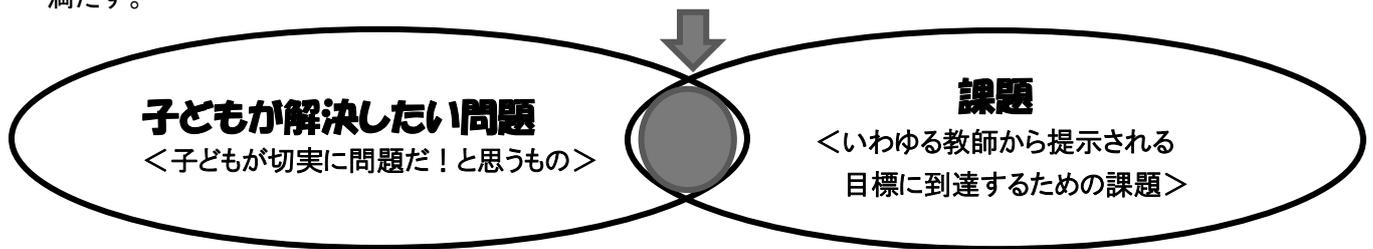
テーマ「ひびき合う 三の丸の子どもたち」

研究課題…子どもが解決したい問題をもち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手だて…子どもの願いや思いの育ちを見とった単元構想と授業づくり

「子どもにとって解決したい問題が切実になった時、ひびき合うだろう」という考えから、
その学習は子どもにとって問題が本当に解決したいものであるかどうか、それに基づいてひびき合っているかどうかに視点を当て、「ひびき合う 三の丸の子どもたち」をめざしている。

子どもが解決したい問題とは・・・

簡単な意味での「解決したい」ではなく、それまでの経過を踏まえて思いを膨らませ、その問題に対して主体的に向き合う問題であり、子どもが「本当に解決したい」と問題がより切実になっているものである。この問題はいわゆる教師から提示される目標に到達するための「課題」ではなく、その課題が子どもの解決したい問題と化している状態であることをめざしている。(つまりベン図の真ん中の重なる部分)そして、以下のような「3つの条件」を満たす。



・研究では問題を追究する過程を授業で実現する。

問題が切実になりうる3つの条件

- ① 事実に基づく問題←(いつも確認するもの)
- ② 多様な、あるいは異質な考えや立場に出会う・知ることができる問題
- ③ 葛藤を内にもつ(=モヤモヤした自分の考えがはっきりしない状態)
単純に(どうしたらよいか)自分で判断できない問題

問題が切実になるほど ひびき合う

ひびき合う姿とは・・・

ひびき合い=みんなで関わり合いながら、よりよいものをめざし、
よりよいものを築き上げていく姿。
目に見える、または目に目ないけど、単元のねらいにより近づく心の変容(「強化」「変化」「統合」)

<「ひびき合う」の表記について>

「響く」という言葉は、「音が回りに伝わって聞こえる」「音が後まで残る」「振動が伝わる」「悪く影響する」「感動を与える」「ある特別な感じに聞こえる」「評判が広く伝わる」(三省堂国語辞典より)などの意味を表す言葉である。しかし、ここでは、子ども同士が、何か一つのことに向けてよりよい物を築くために、言葉をつなぎ、またそこから重ね合わせたりしながら、単元のねらいに近づき、心を変化させていくことを「響く」という言葉で表している。「音

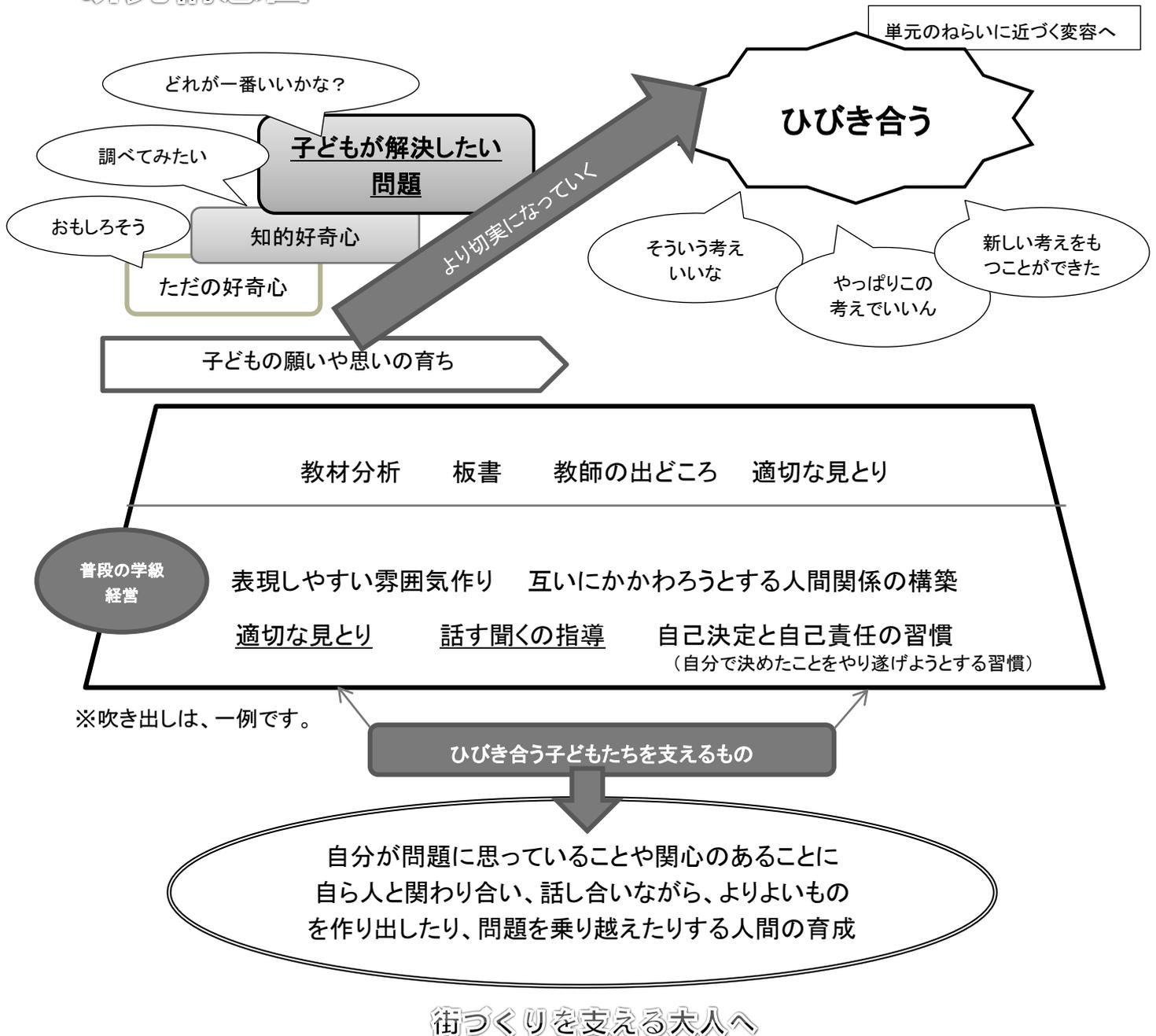
の振動」「影響」などの意味とは区別するため、本研究では「ひびき」とひらがな表記で表す。

また「合う」は、子どもたちが「互いにそうする」という意味(三省堂国語辞典より)で、「合う」という表記を用いる。「助け合う」「話し合う」「認め合う」などと同じように、漢字表記にすることで、その意味を示す。

ブロックテーマ(どんな姿が見られたらよいか)

低学年	中学年	高学年	個学
感じる心、素直に表現する自分 ・人の言動に何かを感じる姿 ・自分の思いや他者からの市ベきを受け止め、素直に表現する姿	追究する力、仲間と支え合う自分 ・自分の問題をとことん追究する姿 ・仲間と協働して追究する姿	仲間への理解、自立する自分 ・仲間を理解しつつ、自分の思いも大切にする姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿	感じる心、気持ちを伝える自分

研究構想図



(1) 研究課題と手だて設定の理由

本校の児童の実態として、安定した家庭環境の中で育ち、与えられる課題には素直に取り組む良い子が多い。勉強しようという気持ちがあるよさがある一方で、仲間と協働する意識が薄く、互いに学びあい、自らより良いものを生み出したり、追究したり、解決したりという「学ぶ」力に欠ける。小田原の中心地に住む三の丸の子どもたちは、小田原の未来を担う子どもたちであり、未来を創る子どもたちである。学校教育目標にも文言があるとおり、その「地域に学び 響き合う たくましい子ども」を育てることが求められているのである。

そこで、本研究では、自分が問題をもち、その問題に対し、「みんなで追究したい」そのために「友だちの意見を聞きたい」「自分の考えを伝えたい」という気持ちをもって学習の場に臨む子どもたちを目指したい。そして、その学びの過程で、自分を変化させたり、新しいことを発見したり、考えを深めたりする姿に到達することを目指す。

子どもたちが本当の意味で「ひびき合う」には、そこまでの思いと願いの育ちから生まれる「問題」がより切実になっている必要があると考える。そうした子どもたちの学びの過程を大切にするために、

- ①何と出会い、子どもの思いや願いをどう育て、どのように問題を子どもと創るか
- ②どのような学びの可能性があるのか
- ③どこで、どのようにひびき合いの場をつくり、ねらいに到達させたいか

といった**学びの道筋＝指導の道筋を記す「単元構想づくり」**を今年も手立ての一つとして大切にしていこう。単元構想は、子ども実際の学びと共に、変化のあるものである。子どもの思考過程が予想と違うことがある。その時の**子どもの思考過程に寄り添い**、問題に思っていることはなんなのかを捉え、単元構想に加除・修正を加えながら、**子どもと共に授業を創っていく**ことを目指す。

学びの道筋は、子どもが違えば、同じ単元でも同じ道筋をたどることはない。学級経営、担任、子ども…いろいろな要因がその時その時で異なれば、道筋も異なる。「こうすればこのようになる」という方法論的な研究ではなく、子どもの出方に対し、教師である自分が何をし、主体的な問題解決学習を実現させるのかは、互いに実践を見合う中で、また自分で実践を重ねていくうちに、自分なりの方法を見つけていくものである。

単元構想をつくるのは、とても労を要する。しかし、その授業一回だけのことではなく、単元構想を描くことを通して、そうした子どもの思考に沿い、子ども側から授業を捉える良さを知り、普段の授業に少しでもそうした授業を取り入れられるようにしていくことが「単元構想」を書く事の意味である。

(2) 研究方法

- ・研究授業(参観&実践)、学級経営検討会の開催
- ・全体研 年間3回 一名ずつ
- ・1人1回授業公開
- ・全体研3回とブロックの授業)は基本的に見に行く。(クラスの実態に合わせて対応してください)

今年は、年間で校内研究日を設定し、年度当初にどこで授業公開するかを決定する。公開日はずらすことは基本的にはしない。

事前に、打ち合わせの時間に、

- ①「子どもが、どんな思いで、どのような問題に向きあっているのか」
- ②「どのようなひびき合いの姿をめざしているのか」

を職員に話す。

- ・研究同人の参加・小林先生による指導・助言による研究の深化
- ・ブロック研の研究授業についての指導案検討は、ブロックや学年で行い(必要に応じて回数や時間をとってください)、よく検討する。

① 学級経営検討会

「ひびき合う」ために必要な土台づくりを重視し、「話す・聴く」のルールづくり(資料②)、互いにかかわりあおうとする関係づくり(資料③)、自分の思ったことを表現できる雰囲気作り、粘り強くやり遂げる習慣などについて、学級経営検討会で、話し合いをしていく。具体的な子どもの名前を挙げながら、具体的な方法を紹介し合いながら研鑽をし、土台作りをしっかりとできるようにする。

② 単元構想づくり<資料⑤>

- ・一度全員で、単元構想づくりについての研修をする。
- ・どこの場面なら、子どもの問題が切実になるのか、追究し、ひびき合うのかを、学年またはブロックでよく相談する。
- ・事前に(前もって)自分で作ってみて、学年やブロックで検討し、授業に臨む。
- ・授業では、指導案+単元構想+本時案・座席表

③ みとり

- ・**単元構想時**単元(もしくは年間)を通して、何人かを詳しく見とる。この子については、具体的な記録を取ったり(行動観察、成果物からの記録、写真)、学年やブロックでも普段から情報交換したりする。
- ・**単元構想時**どんなことが、目の前の子どもにとって切実な問題になりそうか、普段の学級での様子、興味関心などをよく見とって単元構想を描いていく。
- ・**本時に向けて**本時案には、座席表をつけ、座席表に、その単元の中での子どもの思いや期待する変容・ひびき合う姿を詳しく書けるようにする。<ただ、全員について書かなくても、そのような見とりができるだけ多くの子に対してできるようにスキルアップを目指す>。また、どの子をきっかけにひびき合っていくかを予想し、矢印などを書き入れるのもよい。
- ・**本時**「各ブロックのテーマ」と「ひびき合う姿を具体的にみとるために」(資料①)を参考にしながら、ひびき合いの姿をみとっていく。

<みとりの3点セット>→座席表に書くようにします。(座席表の書き方は後日提案)

- その子の前時までの姿。(★これまでの学習や生活の様子、★単元に入ってからの様子)
- 単元・本時に願う子どもの姿
- ②を実現するための具体的な手立て

④ 授業研究

- ・基本的には、国語、社会、算数、理科、生活、総合、生活単元学習。ただ、「ひびき合う姿」をどの教科でも実践できていくことが、研究が普段の教育活動に生かされることにつながるので、他の教科・領域でも提案できる。
- ・授業研究では、子どもたちが切実な問題を解決していこうと、友だちとひびき合う場面をみあえるようにする。また、切実な問題に出会うまでのプロセスも教師として学びの多いところである。ブロック研や全体研で積極的にそうしたプロセスを学べる機会を持つことを推進したい。個学は実態に応じて、好奇心を喚起する場面や導入でもよい。

⑤ 授業研究の視点

- ★子どもにとって解決したい問題が切実になっていたか。
- ★ひびきあっていたか。
- ★それを支える(みとり、学級経営、話す・聴くの指導、自己決定と自己責任の習慣、教材分析、板書、教師の出どころ)は、適切だったか？

の3つを中心に話し合う。話し合いは、授業での子どもの言動をよく観察し、発言・反応・活動・表現物から見とったことを話し合えるようにする。そのために、一人ひとりが授業記録や写真を取って話し合う。子どもの名前や様子が具体的に語られる研究協議になるようにする。
協議記録は分かりやすく、まとめる。

<本年度の研究の重点>

★「新学習指導要領」と本校の研究のつながりを探る。

来年度の「新学習指導要領」の改訂を踏まえ、今後必要となってくる教育に対する考え方や授業のあり方について知り、本校の研究とのつながりについて考えていく。国の施策については、文部省から新たに出ている資料や書籍を読んだり、小林先生の講話を聞いたりし、実践に生かせるよう基盤となる考え方を身につけていく。

★ 授業記録の取り方および分析の仕方について理解する

授業研究の基本的技能である「授業記録の取り方」を学び、その記録や見た物をもとにどう分析していくのかを学ぶ機会を作る。授業を分析する能力を上げることで、日々の自分の授業をふり返り検証することができるようになると思う。研究授業が多く計画される秋前に、小林先生から直接講話をいただく。

(3) 研究組織

低学年ブロック	中学年ブロック	高学年ブロック
岩本 田内 原	加藤 府川 中田	大川 竹澤 竹内
池上 藪田 常盤 教頭	中川 柴田 木村	山本 長山 山崎 岩永
足立 若林 田中	廣瀬 垂水	鈴木 大杉 校長

(4) 研究日程

(別紙参照)

※本年度は、研究日が重ならないように、夏休み前に各ブロック1本の研究授業行うようにする。また、日程を早めに調整し、決定した日程に必ず行えるように見通しを持って計画する。また、冬休み前に全ての研究授業を終えるようにし、年明けは紀要の作成や反省への時間にあてる。

(5) まとめ方(冬休み前詳細を出します)

昨年度までと同様HPに載せます。研究授業での実践(単元構想、本時案、本時の様子、研究の成果と課題)のみです。